

機関番号：34507

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008 ～ 2010

課題番号：20791716

研究課題名（和文） 慢性心不全患者の療養行動支援のためのセルフモニタリング評価尺度の開発

研究課題名（英文） Development of an evaluation scale for self-monitoring by patients with heart failure

研究代表者

服部 容子 (HATTORI YOKO)

甲南女子大学・看護リハビリテーション学部・講師

研究者番号：20337116

研究成果の概要（和文）：

入退院を繰り返す患者の健康管理能力を高めるためには、患者が自らの疾病増悪に伴う兆候や身体的な感覚、日常生活活動の変化を定期的に観察する「セルフモニタリング」の様相を把握、適切な療養生活支援を実践する必要があると考えられる。しかし、現在のところ、慢性心不全患者のセルフモニタリングとは具体的に何を指すのかが曖昧であり、不十分な健康管理や病状増悪の兆候に対する気づきの遅れなどにより、再入院に至る患者は少なくない。そこで本研究は、慢性心不全患者のセルフモニタリングの概念を明らかにするとともに、慢性心不全患者のセルフモニタリング評価尺度を開発することを目的とした。

まず、Rodgersらの概念分析法を参考に概念を特定した。31件の関連する文献を分析した結果、心不全患者のセルフモニタリングは、「良好なセルフマネジメントおよびQOLの改善を導くために、心不全に伴う身体症状の変化、身体活動の変化、体調管理の状況について自覚または測定し、その内容を解釈すること」であることが明らかになった。次に、その概念を基軸として、外来通院中の慢性心不全患者23名に対する半構成的面接を実施し、セルフモニタリング評価尺度(ESSMHF)の開発を行った。調査票は領域1と領域2からなり、領域1は患者がどのような視点で健康管理をしているのかを反映し、セルフモニタリングの「自覚」と「測定」の様相を評価できるようにした。領域2は、患者が「自覚」「測定」した症状の理解状況を反映し、セルフモニタリングの「解釈」の様相を評価できるようにした。それをもとに本調査を実施した。その結果、研究協力を依頼した167名中152名から同意が得られ(回収率91.0%)、142名から有効な回答を得た(有効回答率93.4%)。探索的および検証的因子分析によりデータを精選し、領域1は6因子21項目に、領域2は4因子16項目に分類された。クロンバック $\alpha$ 係数は領域1で0.91、領域2で0.89を示し、級内相関係数は領域1で0.74、領域2で0.67を示し、内的整合性と安定性が証明された。併存妥当性の検討では、EHFScBSとの相関関係係数が高く現れると予測された項目で比較的高い相関がみられた。以上の結果、内的整合性、安定性および併存妥当性が証明され、ESSMHFは慢性心不全患者のセルフモニタリングの様相を査定する上で有効なツールとなることが確認された。ESSMHFは慢性心不全患者が行う健康管理の適切さや困難状況を把握する手段として活用可能であり、慢性心不全患者の個別の状況に応じた具体的な療養生活支援に役立つと考えられた。

研究成果の概要（英文）：

Many chronic heart failure patients are hospitalized repeatedly because many of them are still uncertain about the methods necessary for managing their own health. “Self-monitoring” is a useful concept for breaking through this vicious cycle. However, there are no suitable tools to measure aspects of self-monitoring. This study aimed at the development of an evaluation scale for self-monitoring by patients with chronic heart failure based on the concept of self-monitoring.

First, the concept was identified with reference to the concept analysis method of Rogers and Knalf. In the results from analysis of 31 cases from literature, we defined the self-monitoring as “being aware and measuring changes in physical symptoms, changes in physical activities and health management status in relation to heart failure, as well as interpreting the data for satisfactory self-management and improved QOL”.

Next, semi-structure interview for 23 patients with heart failure were performed based on the concept and evaluation scale for self-monitoring by patients with heart failure (ESSMHF) was developed. Then, outpatient with chronic heart failure completed a self-administered scale comprises 2 domains; domain 1 deals with “awareness” and “measurement” of aspects of self-monitoring, domain 2 with “interpretation” of aspects of self-monitoring. Of the 167 patients asked to participate in the study, 142 gave valid responses, and the reliability and validity of this scale were thoroughly evaluated. Factor analysis showed that the domain1 comprised six factors (21 items) and the domain2 four factors (16 items). Cronbach’s  $\alpha$  coefficient was 0.91 for domain1, 0.89 for domain2. The intra-class correlation coefficient of total score was 0.74 for domain1, 0.67 for domain2. Concurrent validity with the Heart Failure Self-care Behavior Scale was demonstrated.

The scale is reasonably reliable and valid, and was proved to be useful for assessing conditions related to patient self-monitoring. Since it has become an indicator that shows to what degree patients can perceive their own health status, and nurses have been utilizing it to provide individual support to reduce the risks of exacerbated heart failure.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：臨床看護学

科研費の分科・細目：

キーワード：セルフマネジメント、セルフモニタリング、慢性心不全患者

### 1. 研究開始当初の背景

在宅療養生活を送る慢性心不全患者の治療、管理において重要な要素の一つは、患者が体調の変化や心不全症状の出現を自ら管理し、病状増悪のリスクを軽減できるようにすることである。それに対し看護師は、慢性心不全患者が自身による健康管理を行えるよう知識提供し、患者が自らの病状や運動耐容能に応じた日常生活を送ることができるよう支援している。患者の多くは、それを受けて心不全症状の出現に注意を払

ったり、体重や血圧などの身体所見の変化を把握するなど、自らの健康管理を日々の生活で実践している。しかしながら、不十分な健康管理や病状増悪の兆候に対する気づきの遅れなどにより、再入院に至る患者は少なくない。そのため、患者自身による健康管理能力を向上し、心事故を防止できるようにすることが課題となっている。入院退院を繰り返す患者の健康管理能力を高めるためには、一般的な留意事項に関する知識提供に加え、看護師が患者個々の自我管理方法や病状増悪の傾向を把握し、個別的

な療養生活支援を実践することが必要である。そのような個別的な支援を開始するには、まず、患者が自らの疾病増悪に伴う兆候や身体的な感覚、日常生活活動の変化を定期的に観察する「セルフモニタリング」の様相を把握する必要があると考えられる。しかし、現在のところ、慢性心不全患者のセルフモニタリングとは具体的に何を指すのかが曖昧であり、その状況を把握する妥当な手段は存在しない。そのため、どのように患者の個別的状況に応じた療養支援を実践したらよいかの模索が続いている。

## 2. 研究の目的

そこで本研究は、慢性心不全患者のセルフモニタリングの概念を明らかにするとともに、慢性心不全患者のセルフモニタリング評価尺度を開発することを目的とした。

## 3. 研究の方法

ESSMHF (5段階リッカート尺度) および対象者の属性に関する自記式調査を行うこととした。ESSMHF は、慢性心不全患者のセルフモニタリングの概念に基づき、了解を得た慢性心不全患者 23 名に行った半構成的面接から研究者が開発した。面接では「自分の体調を知るために行っていることはありますか？」および「自分の体調をどのように解釈していますか？」を問いかけ、対象者の自由な語りから内容分析を行い内容妥当性の検討を行った。その結果、領域 1(22 項目)は体のだるさや息切れ、むくみなどの自覚や、体重や血圧の定期的な測定状況を問う項目で構成され、セルフモニタリングの「自覚」と「測定」に関する側面を反映し、領域 2(16 項目)はそれらの状況や心不全増悪の兆候に対する解釈を問う項目で構成され、セルフモニタリングの「解釈」を反映していることを確認したものである。

分析方法は、探索的および検証的因子分析、内的整合性および安定性、「ヨーロッパ心不全セルフケア行動尺度日本版(EHFScBS)」との併存妥当性の検討を行うこととした。統計解析には SPSS PASW Statistics Ver.18 を用いることとした。

## 4. 研究成果

研究協力を依頼した 167 名中 152 名から同意が得られ(回収率 91.0%)、142 名から有効な回答を得た(有効回答率 93.4%)。探索的および検証的因子分析によりデータを精選し、領域 1 は 6 因子 21 項目に、領域 2 は 4 因子 16 項目に分類された。クロ

ンバック  $\alpha$  係数は領域 1 で 0.91、領域 2 で 0.89 を示し、級内相関係数は領域 1 で 0.74、領域 2 で 0.67 を示し、内的整合性と安定性が証明された。併存妥当性の検討では、EHFScBS との相関係数が高く現れると予測された項目で比較的高い相関がみられた。

分析の結果、内的整合性、安定性および併存妥当性が証明され、ESSMHF は慢性心不全患者のセルフモニタリングの様相を査定する上で有効なツールとなることが確認された。ESSMHF は慢性心不全患者が行う健康管理の適切さや困難状況を把握する手段として活用可能であり、慢性心不全患者の個別的状況に応じた具体的な療養生活支援に役立つと考えられた。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 3 件)

- ①服部容子、心不全患者のセルフモニタリングに関する文献レビュー、甲南女子大学紀要、査読有、第 3 巻、2009、p 7-13.
- ②服部容子、前川幸子、入退院を繰り返す心不全患者の病状増悪の体験とその意味-心不全増悪への対応策と新たな自己価値を A 氏自らの生活へと編み込むプロセス-、甲南女子大学紀要、査読有、第 4 巻、2010、p 79-85.
- ③服部容子、多留ちえみ、宮脇郁子、心不全患者のセルフモニタリングの概念分析、日本看護科学学会誌、査読有、30 号 2 巻、2010、p74 - 82.

〔学会発表〕(計 2 件)

- ①Yoko Hattori, Chiemi Taru, Ikuko Miyawaki. Self-monitoring Procdess for patients with chronic heart failure, The 1<sup>st</sup> International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Sciences in KOBE
- ②服部容子、多留ちえみ、宮脇郁子、心不全患者のセルフモニタリングの概念分析、第 29 回日本看護科学学会学術集会(千葉)、2009.